写真班（梅崎　春生）

玄関のブザーが重苦しく鳴り響いた。二度短く、三度目は長く。茶の間でモリソバを平らげていた彼は、心臓をどきんとさせ、慌てて箸を置いてよたよたと立ち上がった。彼は自宅のこのブザーの音をほとんど聞いたことがない。ふだんの日は勤めに出ているし、日曜日には来訪者はめったになかったのだから。しかしどうもこのブザーの音は心臓に響く。玄関のブザーと書いたが、玄関にあるのは押しボタンであって、ブザーの音源は台所に取り付けてある。茶の間は台所の隣にあるのだ。このブザーはずっと前の日曜日、見知らぬ電気屋がやって来て、半ば強制的に取り付けていったものだ。取り付け終わって電気屋は言った。電池代だけはおマケにしときます。おマケだって？電池代だけがおマケだって？ブザーの響きの充満した台所を、彼は腹を立てながら擦過し、玄関に飛び出した。腹立ちの対象はもちろんブザーそれ自身とそれを取り付けた電気屋。それにそれを許容した自分自身もだ。玄関の扉を押し開けると、そこに見知らぬ男が二人立っていた。一人は四十前後の赤ら顔の男で、どういうつもりか、一握りの赤茶けたような鬚を、顎の下に生やしていた。も一人はそれより少し若い、頭をイガクリ坊主に刈った男で、肩から重そうに大きな写真機をぶら下げている。彼が玄関の扉を内側から押すとたんにブザーの音は鳴り止んだ。ボタンを押し続けていたのは、顎鬚男の親指だった。

「こんにちは。」

今までボタンを押していた指で、顎鬚は自分の鳥打ち帽のひさしを上方に弾いた。

「写真を撮らせてもらいに来ましたよ。」

「写真？」彼はいぶかしく、またいらだたしげに反問した。「僕の写真をですか。僕はそんなものを頼まないですよ。」

「あなたの写真じゃありませんよ。」

顎鬚はにやりと笑い、玄関の土間にずいと入ってきた。イガクリも体を斜めにして、片足だけを踏み入れた。二人まるまる収容するには土間は狭すぎるのだ。そしてイガクリがぼんやりした声で言った。

「小さな玄関だなあ。」

「近頃の建築はどこでも玄関が小さいのだよ。」顎鬚がたしなめるように言って、再び顔を彼に向けた。「あなたの写真じゃなくて、家の写真ですよ。」

「家を写して何になる？」えたいの知れぬ狼狽を感じて彼は天井を見上げたり壁を見回したりした。「それに僕は……。」

「いや、お心使いは無用です。」顎鬚はポケットから名刺をさっと取り出し、彼が手を出さないのに、それをしゃにむに彼の掌に握らせ、イガクリを目顔で促した。「さあ。」

二人の男は一斉に腰をかがめて、ごそごそと靴のひもを解き始めた。押し付けられた名刺に急いで彼は視線を走らせた。「金融公庫住宅資料調査社写真班・多々良太郎」多々良というのが顎鬚男なのだろう。その顎鬚が靴を脱いでのそのそと上がって来た。押しとどめる間もなかった。続いてイガクリが上がって来た。脱ぎ捨てられた靴で狭い土間は靴だらけになった。彼は余儀なく台所まで後退りした。廊下も狭いので、後退しないわけにいかない。後退する彼を追い詰めるように顎鬚も歩を進め、台所にまで達すると立ち止まり、イガクリを顧みた。

「おもしろいところに台所があるな。」

「そうだねえ。」イガクリは写真機を肩から下ろしながら、吟味するようにきょろきょろとした。「ふん。こちらが茶の間か。」

「ここを撮るか。」顎鬚が両手の親指と人さし指を使用して四角なワクを作り、それを自分の顔の前であちこち動かした。「台所から茶の間を見通すか。」

「ちょっと待って。」彼は慌てて口を入れた。「写真を撮るって、そりゃあ、あんたちょっと……。」

「大丈夫ですよ。」顎鬚がいやにはっきりした声を出した。「あなたを撮るのではなく、家を撮るのだ。家というものは、撮られても減りはしない。それにわたくしたちは命ぜられて、家を撮影する責任がある。それでお給金をもらっているんですからねえ。だから家は撮影される義務がある。」

顎鬚がしゃべっている間に、イガクリは金属製の三脚をどこからか取り出して、ガチャガチャと脚を引き伸ばした。顎鬚は言葉を続けた。

「そこでわたしたちは家を撮って回っている。撮るのは家だけですよ。なに、この家が公庫から融資を受けていることは判っていますよ。我々は公庫の名簿で調べてきたんですからな。おい、用意できたか。」

イガクリはしきりに手足や機械を動かした。

「家にその義務があれば、自然家の持ち主にも義務がある。」

「義務というと、写される義務？」「あんた自身には写される義務はないですよ。そりゃ先刻から何度も説明した。」

顎鬚はいらいらして掌を打ち合わせた。「なぜかと言うと、あんたはまるまるあんただからだ。ところがこの家はそうでない。」

「すると、あなたがたは、いや、あなたがたの、この調査社というのは――」何か言おうと思うのだが、言うことが見つからないので、彼は手の名刺に目をうろうろとさせた。「これは住宅金融公庫の、外郭団体か何かですか？」

「外郭団体であるか外郭団体でないか、というお尋ねですね。」もうこれ以上質問は許さぬといったきつい口調で、顎鬚が念を押した。「ではお答えします。外郭団体ではありません！」

あまりにもピタリとした答え方だったので、彼は二の句が継げずたじろいだ。その隙にイガクリはもう写真機を三脚の上に据え付け、ファインダーをのぞいたり、横を向いてせき払いをしたりしている。肩や背中から急に力が抜けていくような感じで、彼はそのまま茶の間のほうにまた二三歩後退した。（靴を脱がさなきゃよかったんだ）いまいましい気持ちで彼はそう思った。（この間の電気屋だってそうだったんだから、ごめんくださいと言うもんだから、つい聞こえなかったんです。」

玄関に出て行ってみたら、もうそいつは靴を片一方脱いでいやがった）それも日曜日のことであった。電気屋はもう少し怒っているらしく、まだ三十にならぬ若い男だったが、目を吊り上げて、唇の端に泡を少し出していた。そいつはいきり立った声を出した。

「あんたは何度僕に、ごめんください、を言わせるつもりですか？」

「ごめん、ごめん。」と彼は謝った。「奥の間にいたから、

「奥の間？」電気屋は軽蔑したような声を出した。「たかが十四五坪程度のコマギレ住宅に、奥の間も控えの間もありますかいな。こりゃ家の構造が悪いんですよ。玄関の声は奥に通らず、ほとんど外に散るようになっている。これでは玄関の役目を全然果たしていない。ベルを付けなさい。ベルかブザー。ベルかブザーを付けるのは、もうあなたの義務ですよ。」

「あなたはどなた？」彼はうんざりして訊ねた。「どういうご用件です？」

「僕は電気器具屋です。」電気屋は胸のポケットから、ハガキぐらいもある大きな名刺を抜いて差し出した。「この家ではブザーですな。ベルを取り付けるには家が小さすぎる。」

「で、ご用件は？」

「ブザーの取り付けですよ。」電気屋はいらだたしげに言って、残った足の踵も靴から引っ張り出した。上がり框に片足かけた。「うちのブザーは性能がいいんで評判なんですよ。故障は起きないし、音色はいいし。」

「ブザー？誰がブザーを――。」彼はちょっと頭が混乱して、口をもぐもぐさせた。「そ、それは、取り付けてもいいが、値段……。」

「値段のことなんか言っている場合じゃないですよ。」電気屋の残った足も上に上がってきた。電気屋は彼より三寸ばかり背が高かった。「ブザーを付けなきゃ、来訪者が皆迷惑するじゃありませんか。ね、そうでしょう。現に僕がさっき何度、ごめんください、と言わせられたと思います？」

「そ、それは判るが、つまり君が、ごめんくださいを連呼したのは、つまり、ブザーを売りつけるために――。」彼の顔は少し赤くなった。何が何だかよく判らなくなってきたからだ。「でも、僕はブザーやベルの音は嫌いなんだ。」

「なぜ？」

「ごめんください、という声を聞けば、来訪者のおおよその性格が見当つくけれど、ブザーやベルはそういうわけにはいかない。ね、そうでしょう。」背の高い電気屋を奥に通すまいと、狭い廊下に立ち塞がるようにして、彼は必死に抗弁した。「友達のブザーも、押し売りのブザーも、保険勧誘人のブザーも、音色は一つだ。性格がない。扉を開けるまでそいつの正体は見当がつかない。そんなのは僕は厭だね。ごめんください、のほうがよっぽどいい。」

「何を言ってんですか、あなたは。」電気屋は失笑して、右手を伸ばして彼の肩を押すようにした。「いくらごめんくださいのほうがいいと言っても、あなたに聞こえなきゃ意味がないじゃないですか。第一あなたは身勝手ですよ。ごめんくださいの連呼で来訪者を疲労させ、疲労させたあげくに正体を見当つけようと言う。トクをするのはあなただけじゃないですか。」

彼は肩を押されて二三歩後退りした。電気屋は手を緩めず、彼について前進した。そしてとうとう彼は台所まで押し戻され、うやむやのうちにブザーを取り付けられてしまったのだ。その自分の引き下がり方が、今のこの写真屋の場合とそっくりだと思ったとき、彼は茶の間に戻りながら身をよじりたくなるようないましさを感じた。

（つまり俺がまごまごと押し戻されてしまうのは――）彼はしょぼしょぼとチャブ台の前に座り、箸を取り上げながら考えた。（つまりこちらがはっきりしていないためだ。この家がはっきりと自分のものであるという自覚、そいつがこの俺になければだ）

半年前にこの家を建てたとき、それもやっとの思いで建てたときから、その不安定なものが彼につきまとって離れな

い。それには理由もあった。家を建てた費用の約三分の一は住宅公庫からの借入金であったし、残余の二分の一は親類や先輩からの借金であった。彼が自分で出したのは、総額の六分の一にすぎなかった。そのことが当初から彼の意識にまつわり、彼の物腰を落ち着かなくさせている。すべての因がそこにあるようであった。この家が彼の所有物であるというより、自分がこの家の付属物であるような、棟木とかガラス窓とか下駄箱、そんなものと等価値のものであるような気がいつも彼にはしている。（この家がはっきりと俺のものでないとすれば、いったいこれは誰のものだろう？）

彼は箸をソバにつけた。ソバは伸びてぐちゃっとくっつき合っていた。その二筋三筋を引き剝がして口に持っていく。ひどくまずい。まずいけれども食べ残すわけにはいかないような気持ちが別にある。彼はまた箸をソバに伸ばした。台所でファインダーをのぞいていたイガクリが、首をかしげてうんざりした声を出した。

「目障りだなあ。どけてくれませんか。」

「僕をどけろと言うんですか。」彼はソバをつまんだままむっとした顔を台所に向けた。やはり少し声が高くなった。

「あんたじゃありませんよ。」顎鬚がなだめるように目尻にしわを寄せて言った。「こいつが言っているのは、そのモリソバのことですよ。」

「そうだ。そうだ。」イガクリがうなずいた。「公庫住宅写真集にモリソバが写っていては具合が悪い。」

彼は肩をそびやかして何か言い返そうとした。が、すぐに肩を元の高さに戻した。ソバのザルを持って立ち上がった。次の間に足を踏み入れた。部屋はもうこれだけしかない。そこをはみ出るともう庭になる。狭い庭には庭樹がたくさん繁っている。彼は部屋の真ん中に座り、ぼんやりした目で庭を見回す。何か不法なことが行われているが、その正体がはっきりつかめない。これが夢なら、何かの拍子にふっと判ってしまうのだが、夢じゃないからそううまくはいかない。カチッとシャッターの音がした。低い声で二人が台所で何か相談し合っている。彼はさっとそちらを振り向き、また顔を元に戻して、思い切ったようにまずい残りソバを箸でつまみ上げた。伸びて団子状に固まっているので、それは容易につまみ上げることができる。彼はそれを全部無理やりに口の中に押し込んだ。目を白黒させながらそれをかんだ。二人の写真班は何かこそこそ話し合いながら、台所から茶の間に移動し、そのまま彼のいる部屋に侵入してきた。真ん中に座っている彼を無視して、二人は立ったままガラス戸越しに庭のほうをしげしげと眺めている。

「ずいぶんごちゃごちゃと樹が生えているねえ。」

「そうだねえ。まるで植木市みたいだな。」

彼はまるで自分自身が光を発さない光源体みたいな感じになり、そいつをぶち破るために何か叫び出そうとしたが、口いっぱいに詰め込んだソバのために、それはほとんど声にならなかった。